

# 海上でも展開した 東西世界の交流



アラビア、インド、東南アジア、中国などの交易圏がつながって、  
壮大な海の道を形成し、  
東西の諸文明が交流した。

## 季節風と海流を利用した インド洋ルートの開通

ユーラシアの東西世界の交流において、海上のルートは、陸上ルートに劣らず重要であった。海は人々の交流をはばむものという先入観があるが、季節風や海流を利用した航海は、人や物の大量かつ迅速な運搬を可能にできた。数千キロ、ときには1万キロ以上も離れた場所同士を結ぶ重要な運搬手段として、古くから利用されてきたのである。

ユーラシアでは、インド洋のモンスーン(季節風)と海流を利用して、アラビア半島とインドを直通する海上交流が、1世紀ごろに始まった。これにより、エジプトやシリアの商人が、香辛料や絹などを求めてインドへ進出し、代わりにローマの金貨やガラス・金属製品などをもたらした。この交易により、南インドではサータヴァーハナ朝(アーンドラ王国)などが繁栄した。さらに、インドから東南アジアへの航路も開かれ、東南アジアはインド文化圏に取りこまれていった。

一方、中国でも紀元前後のころには、沿岸づたいに東南アジアやセイロン、インド東部との交易が行われていた。したがって、ユーラシア大陸の東西文明は、インドを中継地としてつながりをもったことになる。2世紀半ばには、ローマ帝国から

後漢への使者が、インド洋の海路をたどって現在のベトナムに達している。

海上交易がさかんになると、東南アジアの沿岸部には林邑(チャンパー)、扶南などの港市国家が成立し、中継交易で繁栄した。そして、中国やインドとの結びつきが強まるとともに、ベトナムでは漢字などの中国文化が、その他の東南アジアではヒンドゥー教や上座部仏教などのインド文化が浸透していった。

## イスラーム商人が ユーラシアの海上交易を席巻

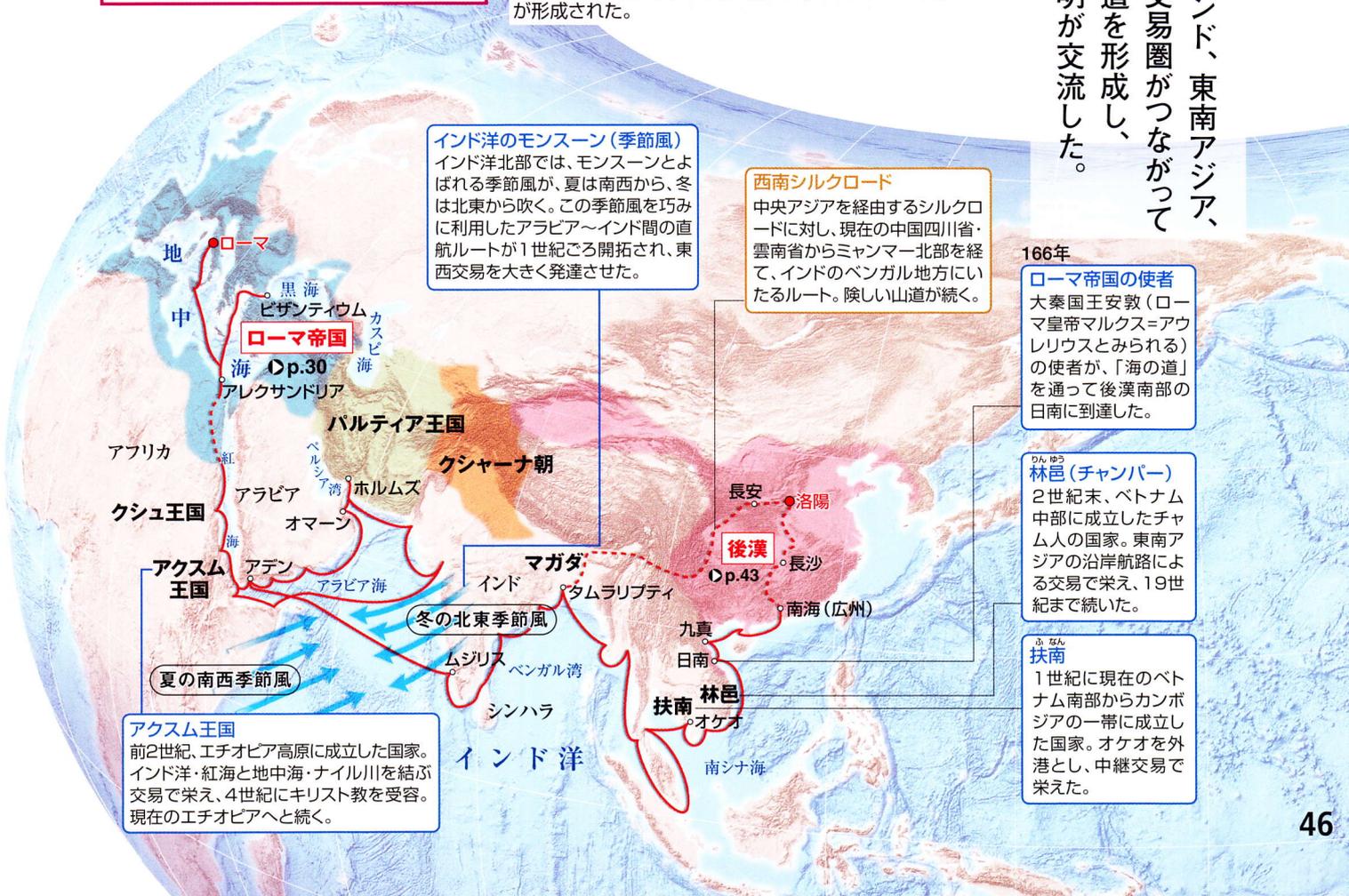
8世紀半ば、イスラーム世界にアッバース朝P58参照が成立すると、海上交易にイスラーム商人が進出し、やがてその主導権を握ることになる。イスラーム商人は三角形の帆を張ったダウ船に乗り、モンスーンを自在に利用して、紅海・ペルシア湾からインド・東南アジアを経由し、中国にいたるルートを定期的に航海した。廣州をはじめ、泉州、揚州など中国の港市には、ペルシア人やアラブ人の商人が多数居留した。また、廣州には海上貿易を管理する市舶司が置かれた。

このように、インド洋を中心として確立された長大な海上ルートは、東西の諸文明の交流を大いに促した。これは陸上のシルクロードに対して、海のシルクロードあるいは海の道とよばれている。

## 海のシルクロード

### 1~2世紀の海のシルクロード

季節風を利用したインド洋航路の開通によって、ユーラシア大陸の東と西を海路で結ぶ「海のシルクロード」が形成された。



**インド洋のモンスーン(季節風)**  
インド洋北部では、モンスーンとよばれる季節風が、夏は南西から、冬は北東から吹く。この季節風を巧みに利用したアラビア~インド間の直航ルートが1世紀ごろ開拓され、東西交易を大きく発達させた。

**西南シルクロード**  
中央アジアを経由するシルクロードに対し、現在の中国四川省・雲南省からミャンマー北部を経て、インドのベンガル地方にいたるルート。険しい山道が続く。

**166年**  
**ローマ帝国の使者**  
大秦王安敦(ローマ皇帝マルクス=アウレリウスとみられる)の使者が、「海の道」を通過して後漢南部の日南に到達した。

**林邑(チャンパー)**  
2世紀末、ベトナム中部に成立したチャム人の国家。東南アジアの沿岸航路による交易で栄え、19世紀まで続いた。

**扶南**  
1世紀に現在のベトナム南部からカンボジアの一角に成立した国家。オケオを外港とし、中継交易で栄えた。

**アクスム王国**  
前2世紀、エチオピア高原に成立した国家。インド洋・紅海と地中海・ナイル川を結ぶ交易で栄え、4世紀にキリスト教を受容。現在のエチオピアへと続く。